

浄土

十月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌第三五二号)
昭和四十四年九月二十五日 印刷
昭和四十四年十月一日発行

第三十五卷

第十号



目 次

表紙「焚火」松涛達文画

お 十 夜.....川 村 悠 穂.....(2)

《特集》 ほとけと歩む人生 一女優村田嘉久子さんを偲びて.....(6)

椎尾 弁匡・守田 勘弥・戸松 学瑛

森 赫子・佐藤 成順

法然上人二十五霊場をめぐりて③.....村 上 博 了.....(14)

シルクロードとコーカサスへの旅日記⑤.....左 藤 治 子.....(19)

仏事の心得とお作法⑤ 仏事の服装.....堀 西 賢 兆.....(24)

十二因縁⑩ 愚痴にかえりて(有).....渋谷 賢 応.....(26)

ひとくち伝記⑩ 刀ではだめこれだ.....高 橋 良 和.....(29)

ハガキでひとこと 秋に寄せて.....(32)

10月



今月のことば

虫の声が聞えてくる。さわやかな秋を迎える頃になると、いろいろの行事がはじまる。

町村の運動会や、秋の祭りのにぎわう声にまじって、双盤の音とともにお念仏が聞えてくるのもこの頃である。浄土宗のお寺では、「お十夜」の行事がおこなわれる。お十夜の行事も、ところによって必ずしも一様ではない。郷土色ゆたかな、民間伝承の芸能をまじえて催されるものもあれば、古式そのままに伝承した引声念仏、双盤念仏によって、厳肅な念仏行事を催すものもある。また、諷誦回向や、塔婆回向を中心とするものなどもあり、その地方ごとによって種々さまざまの儀式儀礼がおこなわれている。

いうまでもなく、お十夜とは、十日十夜とよぶのが、正式の名称であるが、普通に略して、お十夜という。無量寿経下巻に

「ここにおいて善を修すること十日十夜なれば、他方諸仏の国土において、善をなすこと千歳なるに勝る」

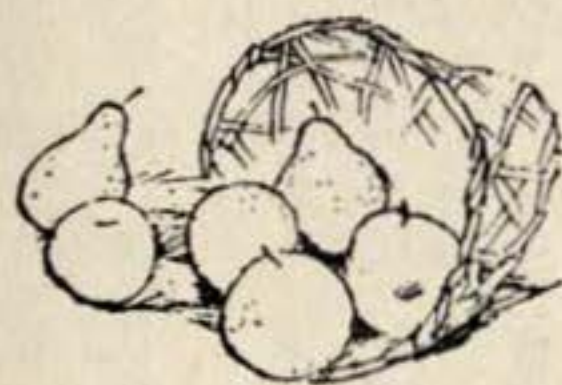
と説かれていることに由来する。

現代の生活は忙しすぎるため、心静かに、お念仏を称えて、自省自戒することは困難かもしれない。

しかし、せめて秋宵のひととき、「なむあみだぶつ」を称えつつづけることによつて、如来さまのおかげのなかに生かされていることを自覚し、安らぎのなかに生活したのむことができたら、すばらしいことだと思う。

古くから伝承されている行事であるが、その行事のなかに、新しい生命が創造されつつ歴史がつづられてきたことも、また事実である。

お 十 夜



(静岡市大鋸町)
(西福寺住職)

川 村 悠 穂

一

夜空に皎々と照る月も、チカチカと輝く星も、もう人間が行くことが出来る時代を迎えた。月の世界から石を持って来た人間は、火星からも石を取ってこようとしている。そして宇宙遊泳船を飛ばして、太陽系衛星を廻ることを計画している。何処まで行かれるのか無限の宇宙に、いよいよ乗り出したのであります。無限の世界、あらためて、はかり知れない宇宙というものを思った時、この不可思議世界の中に生存している自分が、何か恐ろしい様な、不思議な気持ちになります。無数に散らばっている宇宙の星、そしてそこには又、どんなものが待ち受けているのか、未知の世界、それを知りたいが、これ

は又、恐ろしい気もします。兎が餅をついている、あれは仙人に自分の身を御供養した兎が生まれ変わっているのだと、月を見ながら聞かされた話も、かぐや姫が迎えの馬車にのって、空高く月の世界に帰って行ったという話も、もう、これからは子供達に通用しないことでありましょう。しかし乍ら、更に遠く遠く、人間は新しい夢を創造してゆくことでありましょう。

阿弥陀仏とは、冷静なる智慧の勢至菩薩と温かなる情味溢るる慈悲の観音菩薩を兼ね具えられた方であるというので、お寺の本堂は、中心に阿弥陀仏、向って右に観音菩薩、左に勢至菩薩がまつてあり、その頂きには阿弥陀仏がついておりますが、それはとりもなおさず、理

想の人間とは、智と情とを兼ね具えた人であると受け取ってよいことでありましょう。科学的に宇宙の真理を探求する智慧が必要と同時に、情味の豊かさも失い度くありません。月見る人の目が変わったとはいえ、やはり時と処により、人々はいろいろに、月を眺めて行くことでありましょう。お十夜を迎える頃になると、秋の月も澄んで夜空にいろいろの夢をもたせてくれます。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ (法然上人)

二

地上には稔りの秋がやって来ました。秋の行事は、お彼岸の次がなんといってもお十夜です。子供の頃の思い出としては、朱塗りのお膳でお檀家の方が、庫裡で御飯を頂いたことです。総代の方が新芋一俵をいつも仏前に御供養なされたことです。当時、東京に住んでいた子供の私には、一俵のお芋というと、びっくりしたものです。地方によりお十夜の行事は、いろいろのやり方がありますが、稔りの秋を感謝して行なわれるようです。それは十月十五日が阿弥陀さまの御縁日とされているからでありましょう。阿弥陀さまがおさとりを得てから、私達一切のものを救って下さるという、その御恩にむく

ゆるために行なわれるといわれますが、今、ここに命を与えられ、すべてのものによって生かされ、そして生きている自分自身を見つめた時、それは不思議なことであり、有ること難しの命であります。一粒の米、一本の芋そして一杯の水、それはみんな私達を生かし育ててくれるものです。その一つ一つの命のもとが阿弥陀さまであり、又、それが調和されてゆく力のもとが阿弥陀さまであります。

「まさに、いま多生曠劫を経て、生まれ難き人界に生まれて、無量劫を送りてありがたき仏教にあえり、釈尊の在世に遭わざること悲しみなりといへども、教法流布の世に遭うことを得たるはこれよろこびなり、たとへば盲いたる亀の浮木の穴にあえるが如し」

(登山状)

三

有り難いと思えば善いことをし、みんなにも喜こんで貰い、共に明るく、仲よく、正しく過したいものであります。

無量寿経に「この世で善根をすること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善を為すこと千年するよりもすぐれている」ということが、お十夜の起源といわれ

ています。善をすることは、仏の国では当り前のことになっていますが、この世では悪が多いので、その中に於て善をすることは尊く勝れているということ、後に記すように十日十夜即ち十月六日から十五日までの法要が行なわれる様になりましたが、現在一般寺院では、一日だけのお十夜が多くなっています。

仏さまに穫れたものを御供養すること、そして御馳走を振舞うこと、これも善いことです。又、共同募金に寄金すること、これも善いことです。然し乍ら人間というものにはなさないものです。善と思ってやったことが、悪いことにつながってしまうことがあります。稔りの秋を喜び、感謝しようと御馳走をした所、ちょっとしたはずみから喧嘩口論が始まったり、福祉資金を集めようと、赤い羽根の共同募金を始めた所、それをつまみ食いする職員が出て、罪人をつくってしまったこともあるし、思いがけない残念なことが起りやすいものです。そこでこれ等の善根を少善根といわれております。阿弥陀経に「少善根福德の因縁を以ては、彼の国に生まるることを得べからず」と書かれており、仏さまのいう善根とは、南無阿弥陀仏と名号を称えることが大善根であり、このお念仏により、彼の国即ち極楽浄土に生まれる

ことが出来るというので、お十夜の善根とは、お念仏することが大事なことになるのであります。

四

十月はお寺ではお十夜、学校では運動会、遠足そして体育の日だ読書週間だとありますが、戦後、教育熱、体育熱が盛んとなり、智力と体力はのび、想像も出来なかった様に、物質的に豊かになったのにも関わらず、親子の間で、学生と先生そして学校とで、びっくりする様な問題が次から次へと起るのは、何か欠けているものがあるのではないかといわれておりますが、大事な徳育とか宗教というものが忘れられているからでありましょう。

宗とは（むね）と読み、胸（むね）に通じ、大事なことは胸にしまっておくとか、胸に手を当てて考えようとか言うように、大事なということであり、宗教とは（大事な教え）ということであり、宗旨とは（むねをむねとする）で、大事なことを大事にするもので、浄土宗とは、浄土を大事にする意味でありますから、私達の理想の世界、即ち極楽浄土を願うなら、ののしりあう前に先ずお念仏を唱えましょう。矛盾だらけの世界、ままにならぬ世界、分らぬことだらけの世界、お念仏せずにはいられない世界、寄り合い世帯の世界です。お念仏の中に

すべてを溶かして、明るく、正しく、仲よく解決の道を求めて、折角生き抜いて行きたいものです。

お十夜の意義は、体育の日や、読書週間と共に大事なものがあり、総まとめの人格形成に欠くことの出来ない行事でありましょう。

五

今から凡そ五百余年前、即ち後花園天皇の永享年中（一四二九—一四四一）お念仏の信者である足利六代將軍義政の執権職の子、平貞国というものが、領地のことで一族間が、父の伊勢守平貞経と争を生じたので、世を厭い出家しようとして、願を立て、京都の天台宗真如堂にこもって、三日三夜のお念仏をし、満願の明方、剃髪しようとした所、夢に高僧が現われ「汝、我を信ずるところとあつし、来世には弥陀の誓願によって必ず救われるべし、剃髪のこととは後三日待つべし」とて「心だに立てし誓いがないなば、世の営みは兎にも角にも」と一首の歌を示されたので、貞国は感泣して出家の念いを止めた所、翌日公命があり、父は隠居し、貞国は夢の如く三日を経て家督を相続し、執権職を継承すべき旨を命ぜられたので、貞国随喜の余り、更に七日七夜のお念仏を修し、前後合せて十日十夜のお念仏を修せられたので、それから

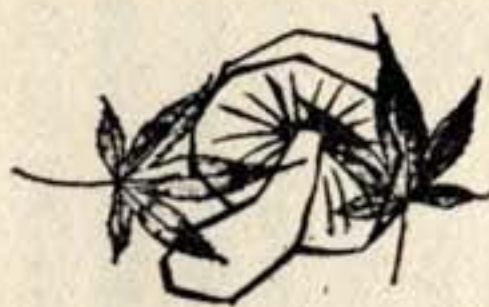
十夜の法要は真如堂に起るとせられています。然しこの真如堂のお念仏はそれより昔に、比叡山延暦寺座主慈覚が中国から伝えて来た引声念仏という法式であって、帰朝後、比叡山常行堂で恒例として勤められていたものを真如堂に移した法要で、今なお十日十夜の古式の行法を伝えており、その後、後土御門天皇の時、明応四年十月即ち足利十一代義澄の時、浄土宗鎌倉光明寺の観普祐崇が宮中に召され、この古式にのっとった引声念仏の十夜法要を修した所、天皇は殊のほか御感あって、この十夜法要を鎌倉光明寺に於て永代勤める式としたので、今もって勤められているのであり、この様な理由で十夜法要は天台宗と浄土宗のみが勤める慣習となっています。秋も深まる今日この頃、静かに一人念仏するもよし、多勢念仏するもよし、少しでも仏前に坐る時間を持ちたいものです。かくして

天下は平和になって、日も月も清く明らかに照らし、風雨も時にかなって、災害や疫病も起らず、国は富み、民は平和安穩にして、兵士や武器は用いることなく、人々は徳を崇め仁を尊び、礼儀や謙譲の道を守るようになる（無量寿経）

——特集——

ほとけと歩む人生

《女優村田嘉久子さんを偲びて》



椎尾 弁 匡

(大本山増上寺御法主)

明治の百年も済んで、九年生れの私、やや回想録が纏って来た。

当時私は欧米の新刊書を見るに忙しく、町の新劇など見にゆく暇はなかった。たまたま本郷座にて川上音次郎という壮士俳優が評判で見に行った。二十年頃から大流行の壮士演説は漢文口調であるが、日清戦争で全く明治維新が新たになった廿八年頃後の潮流と組合せた人気は

大であり、初めて見る田舎出の無風流者にもクワイの頭がゴロゴロ転っている所が都人に受けられるような幼稚なものであった。日増し昇る人気は大したものであったここに並び上って来た月の光は森律子、村田嘉久子などの新女優である。歌舞伎では「女役」が評判されて来た時代であるが、此の新女優の出現は女大のブルーストッキングの出現と共に維新の歩みを早めるものであった。当時の新聞はこれらの新世界の出現の報道に忙しかったが私には余り因縁がなかった。

村田嘉久子さんが七月廿六日死亡の新聞報を聞いて驚いた。四月の御忌に毎日援助されたとき、二月頃高血圧で入院したとの話は聞いたが恢復したといわれ又六月六日に福地君の三回忌をお頼みするなどといわれて始終幹旋尽力なされたものが忽ちの死亡で暗中摸索の他なきこ

ととなった。然し事は次第に明白、願行寺の近くの酒店がその生家であり、同寺を菩提寺とし出入りされ、先住急逝されたことから人生無常に感ずる一入深かったと。

自宅は狭いので通夜も願行寺で、廿九月葬儀、奏蓮社暢譽上人和雅覺心法尼と号して引導されたあとに私が記念講演してお別れすることとなった。

先ず心に浮び上ったのは、この法号をつけたのはいつか。二十二年戦後の伝法が初めて行われた時である。戦時中は聖書ということすら禁じられた付法といったもので、通常の伝宗伝戒は出征者は登壇すれば伝法済みにみなされるのであったが、二十二年となつては二十年三月から住職となっている私も正式の宗戒を伝授することとなった。その準備中の或る日、書院の縁側にある掛け出しにのつたつもりで踏み外し両足は空に落ちたから、しまった、と思い、並立する大石にぶつかり落ちて死ぬのだと思つたら、平地に落ち胸が地面にぶつかる、ゴツンと云つてこれが最後の声、十念と思つただけで覚えがなかった。暫く経つても部屋に戻らぬので探しに来た寺の者が庭に倒れる私を見出し大騒ぎとなり部屋へ運び医師を招いた。その時意識回復し経過を語つたが、心肺不全にて発熱の恐れありとされながら、日増し元気となり

宗戒伝授無事行つた。死中活を得て一心念仏の心境で伝授した。言語は短くとも行僧の感激は深かった。その時、嘉久子さんも受者の一人であつた。情調豊かな少女から演劇界に入り、特に多くの戦死者で敗戦となつた折、心から出家、剃髪、捨世尼となり高声念仏の実現者となつた。多くの尼は正式には低音を常とするに反して法尼の行く処その場は老尼となるときでも、高声天を衝くが如くであつた。これが噂され評判されて益々その出現は歓迎された。特に「累」の劇が人に喜ばれるので神奈川でも茨城でも一巡興行二ヶ月乃至三ヶ月に亘つて連続し、その一巡終る毎に報告に來られた。法尼として「累」の幽霊が助かることを演ずることには真に無比の適材であつたらしい。その頃は私は勿論目もまだ見えたが一度もその優れた演技を見たことがない。

此の度七十六才で急逝されたについて、その戒名で暢譽上人和雅覺心老尼といつてよいかと諮つたら、老の字は大嫌い、老人クラブに入ることとも行くことも好まなかつた故、法尼というように求められた。

どうも老人は老ということは嫌いらしい。増上寺でも今の宗戒伝授を再開した頃、山内には八十以上の老僧が居た。敬老会を開けと勧めても応じない。その内老僧達

は死んだので始めてその会を開くことにしたが、皆、老人クラブは嫌だという。それで長寿会とした。するとその札を見て新宿や千住から、老人クラブは面白くないのでこちらへ入れてくれと来会する方が多い。「成程、村田さんが嫌う通りだ」と云ったことがある。その時、嘉久子さんは、「そのことよりは、段々声が低くなったことがいやです」といわれたので、「それが身体の老化したことで、体力が減じては高声は出ません。さあ共に高声念仏しましょう」と。十念すら高声が続かぬ。「とても九十までは駄目ですね」と云われたのは一昨年である。やはり八十になり得ずに西化された。老化が恐いから「老」と云う云わぬではなく頭が老化せぬことが何より先である。これに就いて井上巽軒先生が念仏するものは長生きすると、山下、堀尾両大僧正の百歳に近きことを讃えられたが、山下孝善大僧正は白寿を超え、小樽天上寺、甲府善光寺の両老大僧正となられた時は百才を超え、百五歳をも数えたのである。私は或る法要に私より先に先にと進まれるそれぞれのその健脚に驚いたことがある。老といわれることを嫌うよりは二本足が達者に歩くことが必要である。仏を両足尊というのは自分の二本足のことではない。智慧と実行との両方のゆるまぬこ

とである。それが実際両足の歩みの鈍くならぬことに伴う。七十のとき、配属将校に負けぬようにいつも学生に先立ち歩くことが出来た。今、九十三で老盲の私、昇殿に五十以上も登段するは苦勞ではあるが十代の若者に遅れはしない。それ故近頃、六月福地さんの三年に本堂に往来すること三回目には苦痛を感じて「とても八十までは駄目ですわ」と嘆声を発せられた村田さんに、「もう一度高声念仏を唱え合いませんか」と云えば「もう試験ずみ」と云って声を出されなかった。

守田勘弥

(歌舞伎俳優)

嘉久子さんは帝劇第一期生の女優さんで、私の父と御一緒に鮮満州を四ヶ月も巡業したり致しました。嘉久子さんは新旧を問わず、ずい分いろいろのお芝居をなさいました。父との傑作は、「玄宗と楊貴妃」「おさん茂兵衛」等、すばらしいものでした。女優さんも大勢いらっ

(東京仏教青年会発会式にて) 昭和33年



しやるのですが、例えば、「壺坂」のお里の様な歌舞伎の女形の演じるものをなされたら、恐らく第一人者では、なかったでしょうか。

舞台の想出はつきないのですが、体の弱かった方ですが、帝劇女優さんの中では一番長生きをされた方です。それというのも信念の強い方で、それは仏門に入られた事でもおわかりでしょうが、舞台も健康もすべてあの方の信念でつらぬかれていたのだと思います。

あの様な人格者をなくされた事が心から惜しまれてなりません。御冥福をお祈りいたします。

戸松 学 瑛

(東京芝心光院住職)

願行寺前住職、故佐藤賢順先生は、毎年暑中一週間、仏教講習会を自坊の本堂で催されました。

聴衆は同寺の檀信徒、一般男女学生等々、念仏読経に次いで、佐藤先生の講話、涼しい本堂も賑かに、うるさい電車も何のその、質疑応答よろしくあって、最後、般若心経のお話になった時、

ギャター、ギャター、ハラギャター、

ハラソウギャター、ボーシ ソワカ

往けるものよ、往ける者よ

完全に往ける者よ

(一歩進んで)

往き往きて、往きつく先き着く先きは花の山

嘉久子さんは、花の山の形容にいたく感動し、喜び勇んで身も軽ろげに家路に急がれました。今も端麗な、あ

の姿が目に見えます。

今は亡き数に入られた嘉久子さん、三千世界の彼方、花の山から見上げ、見おろして嘸かし懐かしがっていることであらう。

嘉久子さんは、姿こそ俗形でありましたが、心は出家を凌ぐ比丘尼、まことに立派な起居、動作でありました。福田行誠上人が嘗って

何故にそりにし身ぞと折々は

姿に愧ぢよ墨染の袖

と、おうたいなされたそうですが、嘉久子さんの如き



(往年の嘉久子さん) 昭和20年代頃

は、世にも稀なる善女人というべきでありましょう。

奏蓮社暢誉上人和雅覺心法尼往生安樂國

森 赫 子

(演劇評論家)

私がまだ子供の頃、人力車で通う母の膝の上ののつては、よく帝劇へ連れて行かれたものでした。当時の楽屋の様子が今も目に浮かんできます。二階の長いお部屋には、丁度芝居の看板に載せられる様な順序で、はじめから順に鏡台がずらりと並んでいました。右のはじが母(律子)、左のはじが村田嘉久子さん、他に一期生の幹部の方で、初瀬浪子さん、河村菊江さん、藤間房子さん方が居られました。ベルが鳴ると私はいつも一人で、ここだけは勝手知った我家の様に舞台裏を通り、客席との境のドアを開けて舞台を見に行くのでした。当時としてはモダンな芝居から歌舞伎まで、一つ一つ思い出しているはきりがありませんが、若い美しい女優さん達の多い帝劇

の舞台はとにかく華やかでした。中でも村田嘉久子さんは、どんな役でもこなす芸達者と、定評がありました。

ある時は舞台から客席へ沢山の鳩が放されたり、楽の日には花輪に囲まれた女優さんが観客の拍手に送られ、緞帳が何度も上がったたり下りたりしていました。赤い絨毯を敷きつめた客席のホールには、大きなシャンデリヤがきらきらと輝き、観客のほとんどがモーニングや振袖や紋付の正装で、それは当時の社交場でもあったのです。女優劇のかからない時には、外国から有名な芸術家が招かれ、音楽やダンスや劇等の公演がありました。とにかく非常に華やかだったのです。

明治四十一年、初めて帝劇が当時の財閥の方々によって創立された時、もちろん私はまだ生まれていませんが、母の話によるとその頃役者は河原乞食と卑められ、女は三界に家なしと蔑まれていた時代なので、女が女優になろうと言うのは非常な大決心だったのです。その創立の日、選ばれた十五人の女優さんを前に渋谷会長のお話がありました。「町人と卑められた商人も事業家として社会に重きをなす今日、日本も昔と違って日に月に進んで行くのだから、日本婦人としても欧米同様、芸術方面にも多いに進んで行かなければならない。ことに軽ん

ぜられていた女子で、別階級の様に社会からみなされていた俳優、すなわち女子と俳優とを兼ねた女優という立場は実に困難であると同時に、まことに興味ある職業ゆえ、一層身を謹み多いにはげむように。表へ出ないで家の中にいて転ばないのは当然で、下駄をはいて表へ出てもつまずかないのが真に転ばない人である。その代り、自分が及ばずながら親とも保証人ともなろう。」

このお話の趣旨が、つまり帝劇の女優さん達の舞台に注がれた心情でもあったのです。プライドを持ちながら、卑められていた役者と女を女優という立派な職業にまで高め上げた功績は、この帝劇の女優さん達によってなされたと言っても大げさではないでしょう。

けれども二十数年で帝劇は解散となったのです。解散の日、目を泣きはらして帰って来た母を思い出します。女優さん達の落胆はどんなであったか……。その後幾人かの方がフリーで女優として残って居りましたが、その内一人減り二人減り、母も亡くなり、村田嘉久子さんは最後まで頑張り続けられた一人でした。私も何度か御一緒に出演したことがありました。いつか村田さんは、髪を剃らない尼さんで、修行をして、資格をとって、芝居のない時には拜みにも行くのだと話されていま

(恩師佐藤賢順先生と) 昭和36年



した。その頃は今とは違って、女優をしながら結婚するのは難しかったのです。「舞台は夫です。」とは、その頃よく言われていた言葉でした。

でも年をとり、人気もなくなり、役も付かなくなった時はどうしようかと、誰もが密かに考えていたのである。その点、村田さんは心の支えとして宗教を選ばれたことは、賢明だったと思います。

今、私は母が亡くなった時、佐々木信綱先生からいただいたお歌が思い出されるのです。これは母ばかりでなく、最後の一人として頑張り続けられた嘉久子さん、そして今は歴史の中に繰り入れられている帝劇創

立時代の女優さん方にも、共に捧げられたお歌ではなかったかと思うのです。もう一度、このお歌を思い浮かべながら、女優の土台石となられた村田嘉久子さんの御冥福を祈りたいと思います。

帝劇の春のさかえは長かりき

今し秋風に涙こぼるる

佐藤成順

(東京品川願行寺住職)

村田嘉久子さんが、尼僧になる信仰を固めたのは、戦後でもない頃で、もう二十年以上も前のことになる。その当時、私は、まだ少年だったのでくわしい事情は知らなかった。最近になって、本人に直接尼僧になった動機を尋ねてみたことがある。すると、「私は昔から仏縁が深かったからですよ」といって、記憶をたどりながら、自分の生いたちから話してくれた。

村田さんの家は、祖父の代から東京の北品川で松本屋

という酒問屋を営んでいた。北品川のあたりは、昔の宿場町で、海岸にも近く、海岸ぞいに立ち並んだ松本屋の酒蔵に、船で酒樽を運んできた情景を、土地の老人は今でも語り伝えている。祖父は、長野県松本の出身で、三河に移り、明治維新の頃には品川にいて、東京から横浜にかけて手広く商売をしていた。祖父の兄と妹は、二人とも仏門に入った。祖父の兄は、品川願行寺にゆかりがあったし、祖父の妹は、出家し、三河に浄雲庵という尼寺をつくり、庵主として厳肅な生涯を終えた。祖父の家業と遺産を継いだ父も、やはり信仰の厚い人で、困っている人達に気前よく物を与えろという善人でもあった。家業のかたわら、庭のなかに立てたお堂にこもって念仏行にはげみ、請われれば、仏像の開眼供養に歩くなど非僧非俗のような生活をしていた。こういう篤信の父が、子供達に、『村田の家では、代々、家族のうち誰か一人が仏門に入る家系なのだ』と語っていたそうである。

村田さんは、生前、たびたび仏教関係の雑誌や新聞に執筆していたし、ラジオで宗教の講話を行ったり、寺院・婦人会・PTAなどの色々な場所で熱心に宗教の話をしていたが、そうした遺稿や話しのなかには、自分の子供の頃の思い出が、正月ののどかな情景、ひな祭りの

頃、お盆の行事など四季折々の行事にちなんで、歳事記風の物語で綴られている。身近なわが家を題材にして、父や母や兄弟達と過したなつかしい幼い頃の思い出を、女性らしいこまやかな情感で追想している。

資産家の、しかも情操豊かな、物心ともにめぐまれた家庭環境のなかで、幸運なスタートの座にいた村田さんにしてみれば、過去のよき時代へのあこがれが、ひとしお強かったのは無理もないことだった。故人が、子供の頃をなつかしみ、父や母の思い出にふけるとき、『村田の家では家族のうち誰か一人が出家する』と語った父の言葉が、父母の姿と二重写しになって脳裡に浮んできたに違いない。『誰か一人が出家する』という道を自ら選ぶことを決心した。以前から、はげしい舞台生活にも信仰を支えとして生きてきたという村田さんが、この父の言葉を機縁に、はつきり信仰を固め、仏門に入ろうと思い立ち、増上寺で加行を受けて有髪の尼僧となった。子供の頃をふりかえってなつかしむ傾向は自然な人情であるかもしれない。しかし、村田さんの場合には、過ぎ去った日々への憧憬が、単なる郷愁の情だけで終ることとはなかった。幼い頃への憧憬が、信仰の生活に入る決意の実を結んだのだった。



〈二十五霊場第十一番札所・東大寺指図堂〉

人上然法

第三回

二十五霊場をめぐりて

村上博了

禱した日本国人のシンボルである。
大仏さまを安置するみ堂を大仏殿という。その大切な大仏殿が治承四年（一一八〇）歳のせを目捷にした十二月廿八日、平相国清盛の部将重衡の軍兵によって、逃げ込んだ僧兵と避難民^{なんみん}もろとも焼討された。人人は「ああ末世か」「仏滅の時か」とばかり嘆き悲しんだのである。

後白河法皇も大変悲嘆にくれられた。大仏さまは頭部も焼け落ちむざんな姿と変り果て、酷寒^{きふかん}木枯^{こかし}すさぶ中、八丁四方の境内には死しうとこげくさい悪息が漂ったのである。その状況を聞かれた法皇は、一日も早く再建を念願された。

先ず復興するためには、その中心となる人を得なければならぬ。法皇は朝廷はじめ諸大寺と識者の意見を徴された結果、浄土宗祖法然上人が最適なりということになったのである。

一
奈良の大仏さま、余りにも有名で修学旅行等で、子供時代から誰にも親しまれている日本の国宝文化財、尊い、み仏様である。奈良市東北部若草山麓東大寺構内にある。聖武天皇が日本国家の発展と平和、人々の幸福を祈誓された仏様で、その台座蓮弁六十四枚日本六十四ヶ国にかたどり、蓮弁のよりに協力互助するならば、明るい希望の充ちた社会建設を祝

る。法皇はただちに右大弁行隆朝臣を御使として、上人には特に大勸進職に就任せられたいと仰せられた。当時は王朝時代である、皇室の命令は絶対的な重みがあった、又無上の名誉として万人のねがうところであったのである。上人はこの恩命に答えて

山門の交衆をのがれて、林泉の幽栖をしめ待つことは、しづかに仏道を修し、偏に念仏を行ぜんがためなり。もし勸進の職に居せば、げき務万端にして、素意もはらそむくべきよしを、かたく辞申されけり
ということであつた。

行隆朝臣復命したところ「もし門徒の中に器量の仁あらば、挙申べきよし」と重ねて仰下されたのである。そこで上人は、醍醐の俊乗房重源を推挙、六月大勸進職に補任された。

大勸進職は一代の名誉である。誰も願う大役である。その大役を上人に委せられた訳である。ここに上人は当代第一の高僧として名実共に教界の代表者であつた。上人は門徒の重源を推薦したままで大仏殿の百興に協力しなかつた訳ではない。大勸進職同様に重源を陰に陽に支援し又は相談役となり、用材の集めに、大仏殿南大門の建立に番匠達を指図された。京都と奈良は、今日電車を利用する時には三時間ほどで往復できる距離ではあるが、往時はそう簡単には行かない。

上人のおいでを願つては、指図堂に滞在をねがって、親しくその監督をうけたのである。指図堂は第十一番の靈場として諸人の結縁するところとなつた。その位置は大仏殿に向つて左側、塀外にあるささやかな御堂である。本尊は上人立像、唇も赤く元氣さかな立派なお姿である。

二

さてここで問題となることは、上人が宋国や印度文化に精通されていたと伝えられることである。

果して然るか。私は奈良指図堂と大仏殿に参拝して強く心をうつものがあつた。それは上人と重源によつて再興された大仏殿にふさわしい表門である南大門を見た時である。大仏殿は残念ながら永正五年焼失してその様式を見ることができないが、その片鱗は宝永六年増上寺三十六世祐天上人等の協力により再々建された現在の太極殿に見ることができるとある。

南大門は印度もよりの代表的建造物であつて、東西五間南北三間重層入母屋造り、扉も袖門もない。あつさりとして、高さ二十五米で松樹の上にそびえ立っている。列柱は同型で美しい、その柱にさしまれてゐる貫、六手先と呼ぶ挿肘木とけしのこぎが織りなす単調な中の豪壮さ美事さである。参詣者は先ずこの門の美しさに強く心をうたれる。

緑りの美しくい松樹の奥に、赤い色の南大門があることは、その色彩のたくみさ、法城を守る人の心の美しさを示すものであり、大仏さまの尊さを自然と物語るものというべきであらう。

この表門にふさわしい大仏殿も又印度模様式を多くとり入れられた列柱の美を見せていたかも知れない。

三

ここで現在の大仏殿と創建当時の天平勝宝時代の大仏殿とも比較すれば、

現在大仏殿

創建時大仏殿

形式重層四注造

重層入母屋造

桁行十八丈八尺四寸

廿八丈四尺二寸

梁間十六丈六尺六寸

十六丈六尺六寸

面積千二百五十五坪余り

千七百九十一坪余り

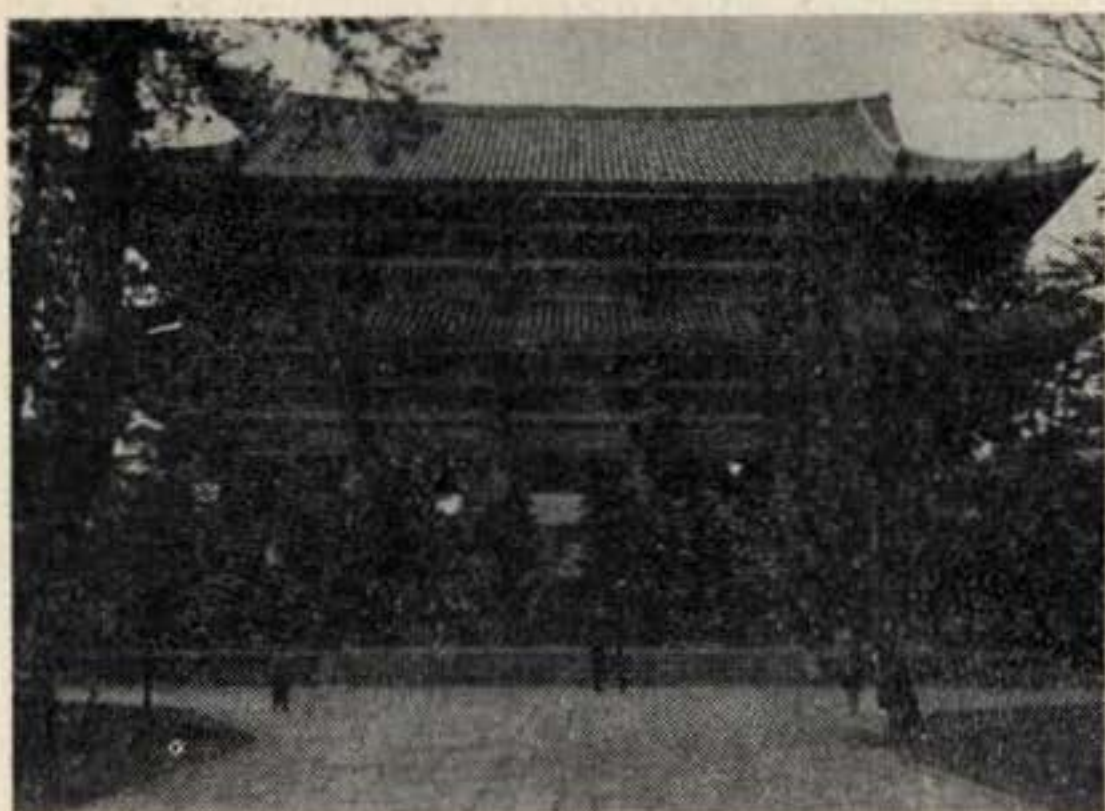
となって、高さはややひとしい面積は旧大仏殿の三分の二となり、相等にちいさい現在の大仏殿は正方形に近いが、創造時のものは長方形である。現在の宝永六年再建の用材は柱六十本、用材二万六千余本、瓦十三万三千有余枚、鳶職十一万余人、人足八万二千余人、大工二十一万千余人、杣工一万千余人、木挽四万八千有余人を要している。従って上人と重源合作の大仏殿も、この両者にはほひとしいものであった。現

在の大仏殿よりはむしろ大きいに違いない。

大仏さまを安置する所を内陣という。内陣の大きさも現在の大仏殿の狭いものよりはかなり大きいものであった。大仏殿境内は用材の山がいくつもあったのである。それをさばいて大仏殿を再建することは仲々容易の業ではない。まして現在のように諸道具器具が揃っていた訳ではない。所謂ちよな造りという方法であった。指揮する方も指図される方も共に、護法のためという仏恩報謝行であった。そこでふれあう心と心とが大仏殿という花を咲かす訳である。上人がよろづ指図するためには、印度や宋国事情に精通されていた訳である。自然と指図堂が必要とされた。法然上人伝記に

俊乗房。観經のまんだら。並に浄土五祖の影を大唐よりわたり奉りて。建久二年の比。大仏殿にして。上人を唱導にて讃談の時。南都の三論。法相の碩学等。数を尽して集ける。二百余人の人数。各したに腹巻を著して。高座の際にのみ居て。自宗等をとひかけて。こたえんに糺繆あらば。恥辱あたふべきよしを僉議して。用意をなす所に。上人。三論法相の深義をとどこほりなくのべ給ひてのち。末代の凡夫出離の要法。口称念仏にしくはなし。念仏をそしらん輩は。地獄に墮すべきよしを解説し給ひければ。二百余人の大衆より初めて。随喜湯仰きはまりなし。悪僧一人。上

大仏殿南大門



人に立むかひて。

抑念仏誹謗の者、地獄に墮すべしとは。いづれの經に。とかれ侍るやらんと申ける間。上人。大仏頂經これなりと分明に答給ければ。彼僧手を合て。後生助けさせ給へと。則御ともして油蔵へ入奉る。

とある。その発端について勅修御伝には。寿永元暦のころ。源平の乱れによりて、命を都鄙に失ふものその数をしらず、ここに俊乗房、無縁の慈悲をたれて、かの後世の苦みを救はんために、興福寺東大寺より始めて、道俗貴賤をすすめて、七日（百万遍）の大念仏を修しけるに、その頃（比）までは、人いまだ念仏の「いみじき」とをしらずして、すすめになかふ（応ずる）者すくなかりけ

れば、俊乗房このことを嘆きて、人の信をすすめんがために、建久二年のころ、上人を請じたてまつり、大仏殿のいまだ半作なりける軒の下にて、人唐の時渡し奉れる、觀經のまんだら、ならびに浄土五祖の影を供養し、又浄土の三部經を講ぜさせ奉りけるに、南都三論法相の碩学多く集りける中に、大衆二百余人をのをはだに腹巻を着して、高ざのきはになみ居て、自宗の義を問かけて、訛謬あらば恥辱を与へんと支度したりけるが、上人まづ三論法相の深義をのべ、次に浄土一宗の秘さく（願）をこまやかに釈し給て、末代の凡夫出離の要法は、口称念仏にしくはなし、もし念仏をそしらんともがらは、無間地獄におちて、八万大劫苦をうくべきよし、觀經の說にまかせて、説給ければ、二百余人の大衆よりはじめて随喜渴仰きはまりなし

と説示されている。口称念仏は老若男女の区別がない、転女成男しなくても、女性もそのまま如来の本願力によって往生する、仏力拡大であり平等である。扶けたまいと念仏を唱えると自然に回向も成就する。勅伝に「その頃までは、人いまだ念仏のいみじきことを知らず」ある状況であった。従って南都東大寺講説は仏教の古都である奈良諸宗派の人々に対する上人の「浄土宗宣言」であったのである。

これより五年前秋、上人は洛北大原勝林院（廿一番靈場）

で北嶺等の諸宗侶に対し世に大原問答という「浄土宗宣言」を行った。この度の東大寺伝道高座近くに、腹巻を下につけた二百人余り座を占め、悪口なり口がすべるような場合には、すぐ恥辱を与えようと、すごい鼻息の荒法師等がひしめいていたのである。悪僧ありということは、強そうな僧ということであるが、一人で私に質問したのは悪意のものではない。ひそかにききたいと念願していたことを確めたと見るべきである。大仏頂経に「念仏を誹謗する者は地獄に落ちる」と説かれたりと、その出点をあげたことは、彼にとって大いなるおどろきであった。かの悪僧手を合せて後生たすけたまへとは、上人と仏法に対する感銘の姿である。

一般聴衆の中に東大寺の一和尚観明房の己講理真という者がいた。己講というのは地位の高いお方である。彼僧は「ことに涙にむせびて、八旬のよはい(ひ)まで、たもてることは、偏に此事をきかんためなりとぞ」といい感涙にむせだと勸伝は記している。大仏殿半造りとはいいい浄土五祖像とたいままだらを拜んでは、他にも更に念仏の尊とく有難さを了解し随喜渴仰された人々が少くなかった。指図堂の御詠歌は

さへられぬ 光りもあるを をしなべて

へだてかほるなる 朝かすみかな

という上人の御歌である。

アミダさまの印契

水 谷 大 成

(愛知県豊田市在住)

七月号、カラ・ホトの弥陀来迎図で細田氏の説明のありました「左手下の阿弥陀仏像」のこと、拝見し、さてはと思いきや曼荼羅を調べましたら、左右の両脇士も左上でした。案外知られていないのがこの本尊の印契です。

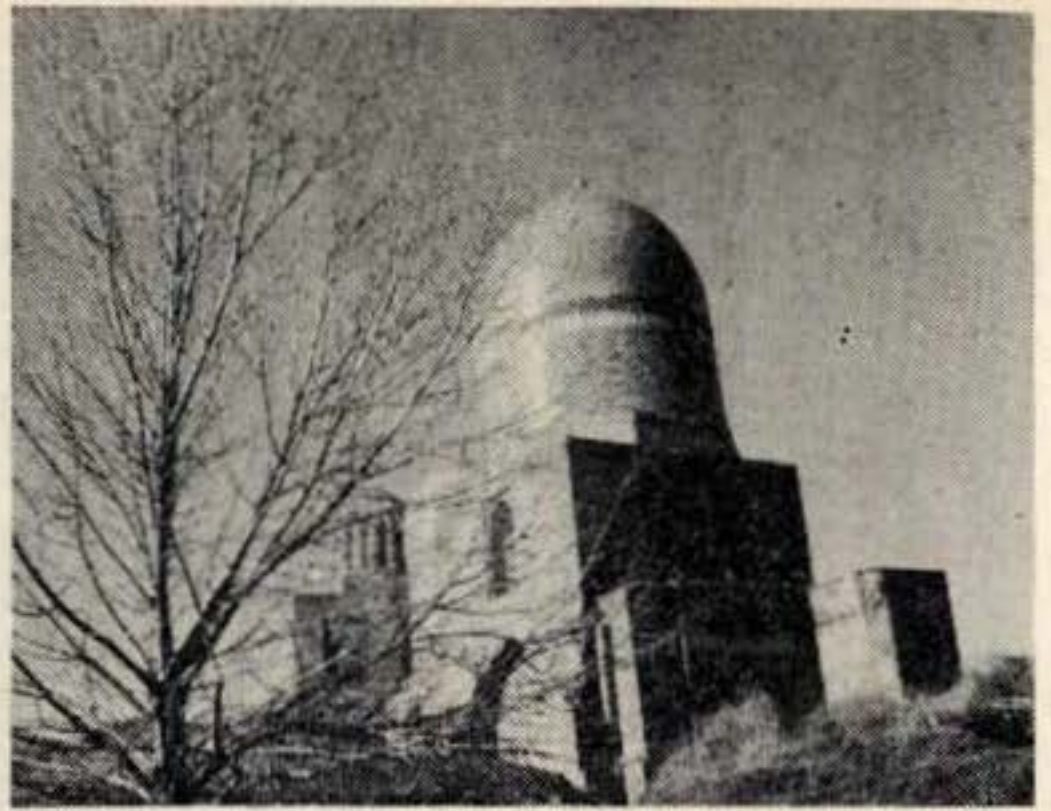
この左手をあげ右手をさげているご本尊が三河豊田市内に二ヶ寺、静岡市内に一ヶ寺、松代地方に三ヶ寺あります。

おかげで系路がややわかりました。

当麻曼荼羅の勢至菩薩も智手(右手)をさげ、悲手(左手)をあげておられます。これ、まったく因時念仏の心をもつて、無生忍に入りたまう心、自然に顯われて手印に見えたり、とあります。

なお、願往生人が子供に生れかわって蓮台に乗りうつり、曲線光明に攝取せられています点は、浄土曼荼羅の舞場会および池中左右の裸の八童子など考えてみたい点です。

専門の方もあるでしょうから、せめて浄土系だけでもはっきりさせていたいただきたいものです。



〈サマルカンド・シャーヒージンダ〉

シルクロードと コーカサスへの

旅日記 一五—

佐藤 治子

泥の町をバスは走る。泥の町といっても泥んこではない。土でできた民家と道路の色、そして冬が終る前の事だから、土の色一色が「泥の町」と感じさせてしまうのだ。民家は低くデゴボコと続いている。

ヨーロッパから中国まで二年もかかって歩いたというシルクロードを、マルコポーロも通ったとか、ここからアフガニスタンへ通じるとか説明を聞きつつバスは北へとゆれながら走って行く。広い広い曠野。左右は桑を植えるための耕地とか、向うの方に見える大きい土まんじゅうのような小山は、昔住民が住んでいた跡なとと説明に耳をかたむける。

ブハラには天然ガス・石油・金等の産出があつて、ガスは遠くロシアへ送っているそうである。ホテルを八時四十分に出発して、約一時間もたったろうか、そろそろ砂漠へとかかある。あちこちにとげとげしい低い木が砂の中からつき出している。ラクダ草というのだそうだ。バスを止め降りてみる。「あ、いるいるラクダが！」 砂の丘をのそりのそりと歩い

三月二十八日。ブハラに一泊しかできぬ旅程に、松田先生が提案された砂漠行に私達は小おどりして喜び胸をわくわくさせてバスに乗り込んだ。エージェントも努力したのだろう。ルパブという、その土地独特の楽器をもったにこやかな青年も、ブハラのフォークソングを聞かせてくれるということでも、乗り込んで来た。臨時経費として三ドルずつ払わされたけれど、機上より眺めた大砂漠の端に一寸だけでも歩いてみるこ

とができるとは何と嬉しい事だろう。

ている。ラクダ草の間を縫うようにラクダを写そうと、皆走って行く。砂漠の砂を手にとってみたり、とげのあるラクダ草にそっと触れてみたり、一刻を子供のようにはしゃいでいた。地上には丈も高くないラクダ草の根は三十五米もの地下から生えているそうだ。

再びバスは走る。もう只砂っばらばかりだ。あの青年が時々ルパブをひきながらナボイ語で歌をうたってくれる。突然バスは止った。右手向うにテントが見える。遊牧民のテントノ 運転手は「昨日はなかったのに」と、運よくテントをはって移動して来た遊牧民が出現したことにおどろいている。「これはこれは」と松田先生のニコニコ顔。もしかすると見られる事もあるかも知れないと、先生は期待していらしたのだろう。そのかも知れぬが偶然に砂漠の中に出現し、テントをはっていたのである。

「一寸待って」と、その青年が先にテントへ近づき交渉してくれたおかげで、私達はテントの中までかわるがわる入って見ることができた。老人夫婦が快く私達をテントの中へ入れてくれる。言葉は通じなくても、そのほほえみと有難うの会釈とで心はとけ合っていく。説明を聞いていた時、背の高い男の人がむっとした表情で入って来た。狩りにでも行っていたのかも知れぬ。留守中に異人種が入り込んだり、テントの

近くで写真をとったりしているのを見て、交渉した上での事は知らないから、血相を変えて飛び込んで来た気配である。何となく面白くない雰囲気私達は一礼してテントから出てしまった。親ラクダは別のテントの近くにつながれている子供のラクダの所へかけ戻って来た。羊が一頭砂漠の上に狼にでもやられたのか死んでいた。

点々と砂漠の中のテントの数は六つ程あったと記憶している。子供達が学齢に達するとどうするのだろうか。

このテントは厚いアンペラの様なもので、内部は竹のような木が支えていて、これを片づけるのに三十分位でたたくでしまうそうだ。テントの真中の天井は丸く明りをとるようになっている。その下にいろりを思い出させるような火を焚く所があり（といっても、灰がしかれているだけではあるが）そのそばにおやかんが置いてあった。私達と一緒に来た土地の青年がもっているルパブも荷物の上にチョンと置いてあった。メリケン粉らしい食糧の大きい袋も積んであった。

とにかく本当に二度と、このような経験は得られないであろうと、感激の私達は砂漠の砂をふみしめながらバスの近くまで子供をだき、見送りに来てくれた女の人におじぎをしてバスの席に戻ったのであった。遊牧民の住居であるテントの出現で、私達の砂漠行がこんなに尊い経験になろうとはノ

後で聞くとところによるとバスで別れた二班の方達は同じ経験を
を得られたが、モスコより逆コースのB班の方達の時は、
テントはもうなく坦々とした果てしなく続く砂漠へドライブ
しただけだそうである。

「サマルカンド」

二十八日。防壁の遺跡の外側のデゴボコ道路を通り、荒れ
ているチヨルビキル学堂を見学しホテルでお昼。そして空港
へ。三時二十分発の飛行機でブハラをあとにし、雲の中を四
十五分飛び、サマルカンド空港へ到着。雀の涙ほどの雨でも
珍らしいというのに、何と相当量の雨にぬれた空港の近くの
丘は草の色の真新しい青さが美しい。

待つこともなくバスへ乗り換え、ホテルへ到着。部屋に入
って外を眺める。前の通りの枯木の並木に、あのうっそうと
した夏のサマルカンドの並木を思い出す。出発前に平山郁夫
先生が一年前の八月に來られて写されたスライドを見せて頂
き、大木立の続く葉の茂り合った並木道の美しさを知ったの
であった。今は枝のからみあった枯木姿とはいえ、木の多い
町である。

だんだんと冷えてきた。例の紙片を見せ、お湯をとメイド
さんにたのむ。ニコニコと大きなヤカンをさげて来てくれ
た。好意にうれしくなってフィンガーチョコレートを何本か

あげると、指で口紅をぬる真似をしてみせる。私はあわてて
違う違うと、別の一本をたべてみせるといかにもガツカリし
た様子。ハハァーン、口紅がほしかったのだな、しまったと
私もがっかり。夜ねる時、薄い毛布で寒そうなので手まね
で、もう一枚ずつほしいとたのむと快くもってきたこのメイ
ドさんに化粧袋の下に一本みつけた口紅をあげることにし
た。こちらからぬる真似をして見せた所、飛び上るほどの喜
びよう。両手で胸にだきしめて、ハラシヨとか何とかペラペ
ラと礼をのべる。一本の余分の口紅で、このメイドさんがこ
んなによろこぶなんて考えてもいない事であった。おかげで
あたたかくねることができた。

二十九日。ラジオか何だろうあの楽の音は飛び起きて耳を
すます。六時頃だったろうか。だんだん大きくなって聞えて
来る。急いでカーテンを引き、下の並木道をみると一団の兵
隊さんの行進だった。あわてて起き出た主人が窓から身体を
のり出した時は先頭のラッパはもう聞えず、靴音も遠ざかっ
て行ってしまった。

朝食後、私達のバスは市内を通り抜け、チムールの孫ウル
グベクの造った東洋一といわれた天文台の遺跡へと向う。ク
ハク台地に登り天文台そばに建てられた博物館を見学。遠く
にうっすらと天山山脈が見える。感慨にふけっている私達は



プュープューと激し

い、あのオートバイが次から次へと走って向うの丘の方へ登って行くのを見て、一体何だろうとあやしんだ。あの丘の向うでオートレースが催されると聞いて「ナーンダ」と、皆苦笑する。そのなだらかな丘にある径はシルクロード。何というちがいだろう。これも時代の流れ、仕方がないと、勇ましくうるさい音に悩まされながらバスへ戻る。ここにも色あざやかなスカートに、とりどりの色のスカーフをかぶったウズベクの女の人達が珍らしそうに私達をみている。

バスはもと来た径を、イスラムのお墓が立ち並んでいる丘の下を径をシャヒジング廟郡へと行く。雨がまたふり出した。美しい土地のガイドさん（トルコ系の目鼻立ち）にカサをさしかけて上げる。

石段を登って行くと両側に色々な建物が並んでいる。幾何学模様の美しい青と白のタイルの廟なのである。雨など殆んど降らないというここサマルカンドの雨に濡れて光る、その青タイルの美しさ。ためいきが出る。チムールの姫の廟はすばぬけて美しい。青空の下の円い屋根の青タイルの美しさはたたえられているけれど、雨に濡れた美しさは生き生きとして光っている。石段を白のスカーフで頭から肩へとまきつけたウズベクの中年の婦人達が静かに登って来る。一幅の絵のようだ。

壁土のようにねっとりとした径をすべりそうになりながらバスへ乗る。ビビハヌイム寺院に行く。チムールが十四世紀に建てたという。ひどく破損している、けれど中央アジア最大の建造物だという。半壊の建物とはいえ、幾何学模様は未だあざやかに残っている。手のほどこしようにもなく荒れはてている。この回教寺院の広い中庭に、大きなコーランをのせたという台が残っている。廃墟の美しさというものを感じる。

囲いを出るとバザール（市場）へ行く人達でにぎわっている。私達もバザールへ入った。新らしく屋根をつけたらしい大きな市場だ。布地屋もある。けれど中心を占めているのは穀物、野菜である。オレンジらしいと近づくときザクロが山と

積んである。干ぶどうの山。あの甘さを思い出す。大きな手で粗末な袋に入れて売ららしい事を考えると買う気も起らない。結果、リンゴを二三買った。小さいリンゴだった。ふと見上げると、あの半壊の今見学した寺院の一端がすぐそこに見える。歴史の中に生きている「この町」「この人達」と、私は市場の中に立って、そのこわれかかった建物に見とれていた。ひげをはやしたやせた老人がトコトコと小さなロバを駆して来る。パン屋にむらがっている人達、ギスギスした感じがしない。皆この辺りに住むウズベック人達なのだろう。私は歴史的ムードに酔ってしまっていた。「地図を買って来た」とか、西瓜の種のような物を紙の袋から出してかじる人、皆それぞれ得意気な様子でバスはにぎやかな私達を乗せホテルへ戻った。

おひるは又こってりしたものの。青空が出てきていたのに、バスへ乗ると又小雨。ここで一番大きいレジスタン（砂の丘）の回教学校に行く。大きな建物が正面と左右にあり、中央が広場になっている。はげかかっているタイル。修理されつつある建物を傘をさして見学。ふと又音楽がきこえてくる。内庭を横切り広場へ出ようとする、雨がふっていたせいか、男女の若い人達が屋根の下で円をえがき楽器に合せ踊っている。何枚か写真をとる。先生のような人が、見物客し

かも外国人らしい一団がかこんでみるので、張り切って次々と一人ずつ踊りつづけさせる。一人がすむと他の人の所へつと行く。その相手の子はいやでも踊らなくてはならないらしい。私達の中の若い学校の先生が急にだきつかれ、困った困ったとしり込みする。皆は手をたたいて「早く早く」というようにはやしたてる。その日本の女の先生はべそをかいてしまった。自分達の仲間でないと思つたあちらの人達も大あわて。急いで他の女の子にバトンを渡し、その子がくるくると踊り出した。タンボリンとか小型のギターを手軽にもつて、遠足に出て草原の上などで休憩の時、踊って楽しむ習慣になつてゐるにちがいない。たまたまこの寺院で雨にふりこめられた時に楽器をかなで、踊り出したところへ私達が偶然来合わせたわけであった。

中央アジアの住民は素朴で親しみのもてる目なざし。雨に閉口したとはいえ、この娘さん達の踊りに手拍手を取り、一緒に笑い、暫くは国境を忘れてしまった。サマルカンドといえど中央アジアで一番古く、最も栄えた町。行く所で何か偶然に面白い事に出合い、遺跡と共に忘れられぬ人達、そして歴史の中に千年以上も生きつづけている砂漠のオアシス、サマルカンドである。

仏事の服装

福西賢兆

(大正大学実践仏教講師)



キーストン特約の写真入り記事「ひろば」サンケイタ刊九月九日号にこんなことが書いてあります。

「はて、こんなミニスカートを神聖な寺院に入れていいものか？」

カトリックの総本山バチカンのおまわりさんたちはますます大胆(?)になったミニスカートを女性のとりあつかいに頭を痛めている。

この「法王庁警官隊」はバチカンのセントピーター寺院を訪れる世界中の観光客を警護するため最近設けられたもの。なにしろできたてのホヤホヤなので、まだくわしい「取り締まり基準」もできていない。

派手な服装の女性があらわれるたびに寺院内部の参観許可をめぐって仲間同士カンカンガクガク。目下のところその場

の判断は当番の警官氏が話せるか、話せないかにかかっているそうだ。(キーストン)

秋風が吹いてきても世はまさにミニ時代。スカートとテールブルスピーチは短いほうがなんといいだしたのもつかの間、ジェット機から万年筆まで、あらゆるものにミニ〇×がついてしまったのが現代なのだ。

夏休みに、法衣を着け如法に仏道修行に精を出していた女子学生は、講習の終る日になると、早速ミニスカートを着がえて、先生サヨナラと帰ってゆく。

ヨーロッパの各寺院で頭の痛いこの問題も日本人の寛容となんでも受け入れるエネルギー的な包容力の前には完全に消化されてしまっているらしいが、しかし、お作法としては仏事の服装をどう心得ればよいのだろうか。仏事といっても

葬儀と法事ではことなるし、結婚式、落慶式、上棟式などの慶事としての仏教儀式があるが、お祝のほうはさておき、葬儀法事を中心に考えてみたい。

さて、葬儀の場合は、喪服であるから、和洋服を問わず黒ときまつている。和服には伝統があるから問題はおきないが、洋服の時、やはりあまりミニでは具合がわるい。それというのも、儀式を行う寺院や自宅では、まだ大半が畳に坐ることを前提としているから、参列者側の躰躰を受けやすいからであるがともあれ女性は流行に敏感なのだから、ある程度のミニはやむを得ないと思っている。それだからといって、夏の喪服にノースリーブは慎みたい。

ヨーロッパに旅行した女性の話によると——再度外国の例話で恐縮だけれど——寺院参観に出かけた処、ノースリーブのため、門番に入寺をことわられて困っていた時、ある外国婦人が自分のネッカチーフを貸してくれたので、それで両肩を覆い、やっと参観できたということ、それ以後いつもネッカチーフを持参して困っている人（おそらく日本人女性）に出会った時は、使ってもらったから、これからあちらへ旅行する人の参考になればということであった。ただの観光にも神経を使うヨーロッパと比較すると日本はいいなと思う反面寛大すぎると思うし、温度と湿度の高い日本なら当然さと

いう意見に対しては、せめて厳粛な行事の時位は、酷暑であってもきちっと著ることとし、そのつらさも厳しさの前には心頭滅却すればという想いをして、我慢しなければ、故人に對しても相すまないと思うのである。

葬儀が済むと、初七日忌法要から五七日忌、満中陰忌明までの法要には、黒で通し、ハンドバッグ、靴等も黒ときまつていることはいうまでもない。

年回法要に参列する際は、和洋装を問わず派手な色をさけた色無地を着用してもよい。和服には、黒地の帯を著け、羽織を著けないのが通例であり主賓として招待されても立派に振舞える。

普段のお墓まいり、参詣には、ごく普段着で行かれるのがよろしい。お寺まいりの服装に大切な心構えは、法衣という壊色くわいしきを着用すること、これは、あらいざらしを著るということであります。身に著けるものに貪著の心が強いと、それにとらわれて本当のものを見失いやすいと、仏制により誠しめられており、垢のついていないものをこざっぱりと著るここそ大切なのである。つまり華美をさけ、デザインもシンブルにし、化粧もあっさりとして仏事にのぞむように心がけ、数珠、袈裟、経本等もお持ちになれば一層深い感銘をうけられ、信念を倍增されることでありましょう。

十二因縁



愚痴にかえりて(有)

渋谷 賢 応

(長野県茅野市心光寺住職)

愛慾の因果関係の最後に提示せられている「有」は、六入より始る因果の終結であると同時に、次に生、老死に発展する基盤となっているものでございまして、その意味より無明、行の行、識、名色の名色と同様、その部分の帰結であると同時に次の部分への起点でもあるわけでございます。

全体の見通しの上に立つ「有」はそのような地位ではありませんが、さてこの「有」がどのような意味あいをもつもので

あるかを思案いたしますとき、六入、触、受、愛、取と内面に食い込んでまいりまして、この部分での一番難解なものはこの「有」であると思われるのでございます。

経によりますと「有は煩惱により業を作り次の果を定むる位」となっております、又「生存そのものなり」とも解釈せられておるのでございまして、「流遷して常住ならざる世界現象を言う」となっておりますのでして、諸行がうつりゆく無常の姿を、ある一瞬をもって切ったその時の断面とも申せましょうか。そう思索して世をながめますれば、世のすべては皆その時その時において「有」の姿をもって私たちに映ずるわけでした、その意味よりして「生存」そのものとも受け取ることのできるものなのでございます。ただしこの生存は無常の相を常住と勘違いして受けとめるものでありまして、本来無常なるべき「生存」を、常住の相なりとしてそれに繫縛し執着する所より迷界流転の姿を見るのでございまして、六入、触、受、愛、取、と流転した帰結において有として断定することによって、いよいよ迷界を決定づけていると思われるのでございます。

このことはただ概念的にとらえているだけでは真実味がございせん。実際私たちが家庭生活において日々味う現実の中においてこのことを深く内観するとき、この教のもつ深さ

と確かさに驚嘆すると同時に、現実の私を慨歎せずにはおられないのです。

十二因縁が、迷界流転の因果であることは重ねて申しました。それ故に、それよりの離脱がなければならないこともまた言うをまたない所でしよう。大変むずかしいことではございますが、それにはこのことをよく認知し、その上で、これよりの超脱をはからなければならぬのでございます。

○

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、二匹の鬼が一つの箱、一つの杖、一つの杓を間に置いて共に争っていました。二匹の鬼はこの争いに毎日をついやして平穩な日とてありませんでした。時に一人の人が来てそれを見、見おわって二匹の鬼に問うて言うのには『この箱、杖、杓が一体なんの不思議なことがあってこのように共に争っているのかね』と、二匹の鬼が答えて言うのには『この箱はよく一切の衣服、食物、床、臥具その他ほしい物を何んでも出してくれる宝の箱なのです。この杖をとる者はどんなに強い敵が現れても一搥の下に打ちくだくことのできる杖でございます。またこの杓を履くものはどんなに遠くにでもすぐさま飛ぶことができ、これをさえぎることはできません。このように三つとも大切なものばかりですのでどれも自

分のものにしたいのです。そのために毎日争いつづけているので』すと、これをじっと聞き入っていたその人は二匹の鬼に言いました。『君たち少し遠ざかっていなさい。今君たちに満足のいくように平等に分けて進ぜよう』そこでこの二匹の鬼は言われるままにその品より遠く離れました。その時、すかさずその人は、箱をかかえ、杖をとらえ、杓をはいて天高く飛び上ったのです。二匹の鬼は愕然として驚き、天を仰ぎましたがもう彼方に去ってしまいました。そして天上より人の声のみが空しく鬼の耳にひびいたのです。

『君たちの争いを俺は去ってやったんだ。もうこの上は争うこともあるまいて』と」

衣食住の物慾のとりこになって相ともに争い、求めて得ざるの苦しみにさいなまれ、愛する者とも離別しなければならぬ。憎い者とも会わなければならない愛憎の葛藤よりの離脱を、この經文は実に言い得て妙と思われるのです。二匹の鬼の虚脱した顔を上げて天を仰いでいる姿を想像する時、可笑しさを通り越して悲しみに似た同情を禁じ得ません。そしてそれが私たちの日々の生活に具現せられていることを知るとき、身につまされてぞっとするのです。

さて「有」を追求してその仮面を剥ぎ、真実に至るの道は、こうまでむごたらしい仕打ちに合わなければ開けないも

のなのでしょうか。

○

法然上人玉辭の卷に次のようなお話がございます。

或人「上人の申させ給ふ御念仏は、念々ごとに仏の御心にかなひ候らん」などと申しけるを「いかなれば」と上人かへしとはれければ「智者にておはしませば、名号の功德をもくはしくしめし、本願の様をあきらかに御心得あるゆへに」と申しけるとき、「汝本願を信ずる事まだしかりけり。弥陀如来の本願の名号は、木こり草かり、菜つみ水くむたぐひのごときものの、内外ともにかけて一文不通なるが、となぶれば必ずむまると信じて、真実にねがひて、常に念仏申すを最上の機とす。もし智恵をもちて生死をはかるべくば、源空いかでかの聖道門をすてて、この浄土門に赴くべきや。聖道門の修行は智恵をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかへりて極樂にむまると知るべし」とぞ仰せられける。

上人が「もし智恵をもちて生死をはなるべくば、源空いかでかの聖道門をすてて、この浄土門に赴くべきや」と仰せられたあたりは、いかにも当代知恵第一として自他ともにゆるす自信のほどが示されています。その上人が「浄土門の修行は、愚痴にかへりて極樂にむまると知るべし」と申される

には余程の決意の転換がなければなしとげられないことと思えます。

さき程「有」とは本来因縁所生の法として流転する無常の姿である現象を、その相を見て常住と思ひ込み、それに繫縛せられることであると学びました。そしてそれよりの離脱は、三つの宝を持ち去られた二匹の鬼の姿にたとえられました。今法然上人が知恵第一として内外ともに許すその知恵をかなぐり捨て、愚痴にかえることを宣言せられたいということは、三つの宝を他よりうばわれた二匹の鬼以上のアクシデントなできごとを思わなければなりません。

愚痴にかえると申せばいと易しと思うのが常ですが、実はこのことは迷界より悟界に入ることの意味し、有を離れて本有に入ることの意味し、要するに、自分の限界を直視するといふ、人間にしてその人間を克服する最上の勇氣を意味することに外ならないと思うのです。人各々、器の大小知恵の有無は別にして、心に自ら自負する所は誰しも皆同じと思ひます。それを他人の手をまたず自分より打ちやぶるということ、実は、実は悪易な業ではないと思うのです。易行道というその名に溺れ、安易な妥協を以て自らを慰め、浮薄な信を以て他を説いてはならないと思うのです。



ひとくち伝記(十)

刀ではだめこれだ

— 林 玄明師 —

高橋良和

昭和九年山下現有門主の逝去したあとの門主問題で、林彦明百山法主と郁芳随円黒谷法主との二人が、そのあとの門主の候補にのぼっていた。

当時は、推せんの制度がなかったので、選挙によらなければならぬ。そこで林彦明法主は、さっと辞表を友人の簀内玄瑞氏にあずけて、その年の五月に法主の座を去ってしまったのである。

選挙までして、しかも競争して、一宗の管長職につく必要もないし、未練もない、それより、学徒養成の仕事をつづけたいというのが、その念願であったので、法主を辞任すると、そのまま知恩院の専修道場に入って従来からつづけていた、上首の仕事に専心することになった。

た。

専修道場は、本山経営の宗学研究の道場で、たえず十数人の若い僧侶が滞在して、上首はじめ教授たちが、個人的な指導をうけていたのである。

若い学徒の指導にあたった林彦明師は、この道場にくると、すぐ目をつけたのが、隣国中国仏教徒との交流のことであった。

そこで、毎日のように各宗の学人や、代表のところをたずね、また財界人の協力を求めて、会員づくりをはじめめたのが、日華仏教研究会なのである。当時の人々のなかには、佐伯定胤法隆寺管長、大西良慶清水寺貫主、塚本善隆博士はじめ、各宗派の中国仏教の研究者がほとん

ど網羅されている。

この研究会は、中国仏教徒との交流を求めて、戦争中のさなかに、二度、三度と使節を彼の地に送って、中国仏教徒による、親善の契を深め、その都度、林彦明師は、団長となって、彼地を訪問しているが、戦争だけに、しかも今日と異なつて、船によらなければ渡ることの出来ない国だけに、かなり難澁をきわめたのである。然し当時はそれしか仕方がないこと、しかも日華事變の昭和十四年の中国訪問は、宣撫工作のまだ行き届いていない、華北、華中のほとんどを回つて、同地域の僧侶や居士の人々と会話して、中国仏教徒との親善によるのみ、両国の繁栄はありうると力説した。

北京の夏蓮居はじめ中国の居士の有名な宅も訪ねて、握手したのであった。

たまたまそのときである。

北京にはその頃、北支方面軍司令部があつて、その司令官が、陸軍の杉山寧元帥である。

六月のある日の正午前である。高い塀をめぐらしたそしていかめしいこの軍司令部を林彦明師は訪ねたのであ

る。

前もつて、北京別院の柴田玄鳳監督から、申し入れてあつたので、すぐさま、応接室に案内されて、しばらく待つうちに、杉山軍司令官が面接するというのである。

これはまた珍らしいことで、戦争最中の中国で、軍司令官が、日本からやってきたこの一行の代表に面会するなどということは、もつての外のこと、その証拠に、当時の軍隊の中のかせようを想像したら、わかるのである。

普通なら、光榮至極と、多少の緊張はあつた筈なのに、林彦明師は、落ちつきはらつて、おもむろに、僧服の襟を正して、司令官室に足を踏み入れたのである。

戦地であるから、華麗な飾付けはないが、それでもやっぱり司令官室は立派である。

ソファの上に静かに坐つた林彦明師のうしろには、随行の人々が緊張した態度で坐つていた。

やがてはなしが中国との親善問題に入つたのである。

そのとき、林彦明師の顔紅潮を帯びてきたようであつた。

閣下、日本と中国とは仏教国です。それに今回のいくさになってしまったことは残念なことでございます。

ということ、まず戦争に入った不幸をのべると、そのあと更に語気を強くして、杉山軍司令官に切り込んだのである。

これからの日本と中国とは戦争によって交流は出来ません。あなたがたがいる間は、とても親善は出来ません。刀や、鉄砲ではだめです。

本当の親善はこれです。私たちにまかしておいてください。仏教でなければできません。

といいきって、林彦明師は自分の着ている僧服の肩をたたいて、「これでなければ出来ません」僧侶でなければ中国との交流がはかれない、と軍司令官の室でいい放ったのである。

さすがの杉山軍司令官も、そのときには、ことばがなかった。ややしばらくしてうなずいて、

そうです。

といったきりであった。

このことばを最後に会見は終ったが、横についていた

随行の人たちは、ヒヤヤとしたらしい。

軍司令官に対してのことばとしては、このような強いことばをいった訪問者がなかったらしい。

司令官室から下がって応接室にいくと、副官の松井大佐があわてたようにやってきていった。

あのことばにはおどろきました。杉山軍司令官なればこそ、黙っていらっしやいましたが、外の方なら処分ものですよ、あのことばは再び他の軍の方にはなされないようにねがいます。

と口止めをされた。

松井大佐もおどろいたことらしい。

然し林彦明師は、顔色ひとつ変えず、仏教徒としてのいい分をのべたということ以外に何の悔もなかった。

司令部を出るときの足どりも軽やかであった。

〈お詫び〉先月号ひとくち伝記（九）の「開教に生命をかけた人」——松尾諦定師——の傍点の部分、諦道師となっておりました、執筆者ならびに読者の方々に御迷惑おかけいたしました。お詫び旁々訂正させていただきます。

《ハガキでひとこと》

秋に寄せて

真野孝信

(京都洛南・正法寺住職
八幡保育園長)

秋は色声香味触法の六境の一々が、私の眼耳鼻舌身意の六根に対して、その何れもが個々にも総合にも、深みと趣(あじ)を最も静かに覚えさせてくれる季節であることを、強く感じるのは齡のせいであろう。

春の「新生」に対して、「円熟」とでもいえばよからうか? とりわけ「京の秋」といいたい、庭の手入れや盆栽のすきな私には自坊の秋が一番よい。



幼の頃からの思い出の一々に、「秋」は香りを伴っているように覚えて嬉しい。自然にも、人為にも……………

彼岸会につづく指定巡教、園の運動会等々内外の日程に追われるのも秋の恒例であるが、最近では寺の裏山に「まつたけ」の出なくなつたことが淋しい。それでも「もくせい」は相変らず芳香を放って、秋の深みをつづけてくれる。保育園児の「はっぺ」が可愛くブクツとふくらんでくる秋は楽しい。

ひぐち まさよ

(宮城県迫町佐沼在住)

ひんやりと冷たく肌にしみる秋風に一枚一枚、色づいた木の葉が舞い散る——「あきはきにけり」は何も掛詞の意味だけではなく、人をして感傷的ならしめるものがある。人言いて曰く、無常を感じさせられると。

いろはの今様歌のとおり、今や色美しく咲き匂う花々もいつかは散ってしまうし、血氣盛んな若者も、花と咲きはこる娘たちも白髪の人と化するのである。花がうつろうのも人が死ぬのも現世を仮りの姿と観じて、むなしさを感じるのも無常である、秋が特にこの無常を哀切な悲しみとして人をして感ぜしめるときには、その深い感動は文学の創造への内在的な契機ともなり得る。西行法師や寂蓮でなくとも、秋の夕暮れなどは特にそういった「あはれ」として受けとめられており、その歌は無常観が底流となつている、「方丈記」「平家物語」にしても然り、謡曲の多くの作品にしても然り、その底流となるものが「仏教の無常観」としてとらえられる文学作品は和歌のみならずかなり相当ある。

ところで無常がそのように流転や消滅や死

を意味する限り、永生を、常住を願う人間にとって、それをむざんにもふみにじる無常という真実は人間的ではないとも言えようが、その無常とは人間本来の願望にはそわぬものだとして無常観によって現実を再認識し、正しくとらえるということに。換言すれば、科学者の態度にも通ずる客観的なみ方をするということ、真実をあるがままに受けとめるということに他ならない。何ら悲しみ嘆くべきことではない。赤ちゃんが日増しに大きくなることも、自分の仕事を着々進展していくことも、科学の日進月歩することも、行く川の流れがたえずその水がもとの水でないということも万物流転の大自然の原則にかなっているということであり、大自然の原則を正しくとらえていこうとするとともに仏教の本来の教えがあったのではないかと考えられる、日本の仏教というと、何かしらお葬式を連想して、寂しいようなもの、年より臭いものとして受けとめられている。その証拠に一般の人がお寺というと、陰気臭いところと言っている。極端な例では、「エンギが悪い」といふ嫌う

ことからでもわかる。何しろこわいところであるらしく、「ありがたくなるほど荘嚴な感じのする、閑寂ないところ」とでも言おうものなら変り者とか年より臭いなどとひやかされる。それに対して教会——結婚式、お社——お祭り、神主さん——地鎮祭。上棟式、鉄道の開通式、進水式、お正月、と何やらおめでたいと言うのである。「エンギがいい」のだそうである。仏教に比べて明かるい感じがするけれど深みのないような奥ゆきがないような感じも同時にするとは同僚の先生の言だが、それに対する批判は別として、現状はこうである。

無常観についても然り、日本に入ってきた仏教が一面ではこのような形で一般庶民の間に浸透し、「日本の仏教」として発展し、継承されてきたのも日本民族の好みの方向に合致していたからとも言えよう。四季、美しい自然、この情趣ゆたかな日本の風土に即し、日本人の心に最も溶け込みやすい形に発展してきたものと、換言すれば、善意の偏見による歪曲であり、新たな日本仏教としての大

成とも言い得よう。

秋、——スポーツの秋。勉強にいそしむ秋、食欲の秋。灯下親しむ読書の秋。せちがらいけんそんな世の中にあつて自然に接し、泥の中の白蓮のごとき心を取り戻す秋。思惟する秋。哲学する秋。大自然の与えてくれたこの好機を存分に活かしたい。「秋によせて」、テニスとさつま芋の他に、以上のようなことを思いました。

とにかく、これでも日本人であります以上「大和撫子」のプライドを害ねるような日頃はオテンバ娘のきかん気のこの私でも、秋の虫の集く夕べともなれば、しんみりと「里の秋」や「赤とんぼ」などの童謡を「口ずさんで涙することもございます。哲学する学者にはなり得ず。般若にはちと縁遠い感情的、感性からのアプローチの強い浄土の信仰が弱い人間である私にはむいていけるのかも知れませんが。心静かに、一切をおまかせしてお念仏を称えさせていただきます、南無阿弥陀仏、ナムアミダブツ。

◇ 浄土トラクト ◇

- 四季の寺まいり (再版) 安居香山著 価30. 円15
 浄土宗のおしえ (五版) 宮林昭彦著 価30. 円15
 一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120. 円35
 選択集私解 竹中信常著 価120. 円35
 ものいう石 竹中信常著 価150. 円45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい。

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
 振替東京 82187

〓御年始のご挨拶がわりに御用を〓

《 予 約 受 付 中 》

『浄土宝暦』 価30円・送料25円 40ページ

50部以上より単価22円 送料実費
 例年通り発行いたしますのでお早目にお申込み下さい

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番

「浄土」講読規定

一部 定価 六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年九月二十五日 印刷

昭和四十四年十月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
 会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会